



丸木舟「ゆりひめ」実験航海
姫島→松山
1985.7.25

特選ブログ shin1さんの 日記

Vol.11



人間牧場主
若松 進一

島へのエール

浮かんでくる島々と
島人の思い出

私は海沿いの町に生まれました。ゆえに子どものころから今日まで目の前に広がる瀬戸内海と水平線に浮かぶ様々な島を見て育ちました。もしも人間に胎教があるのなら私は島人ではないものの、島の影響を強く受けた人間の一人かも知れないのです。そこで私と島の関係を思い出す順に羅列してみました。

- ① ひょうたん型由利島共和国(旧中島町由利島)で20年間、無人に挑む少年の集い実施。
- ② 丸木舟を製作し大分県姫島から松山まで、140キロの黒曜石ルート解明の旅を実施。
- ③ 無人島に直径10メートルの竪

穴式住居を建築し4日間語り部の集い実施。

- ④ 済生会病院船で離島旧関前村へ出向きフロンティア塾の島シンポを実施。
- ⑤ 島根県隠岐西ノ島にて牧畑農業シンポジウム記念講演。
- ⑥ 火山活動で全島避難した東京都三宅島にて講演活動。
- ⑦ 鹿児島県瀬戸内町加計呂間島に私設公民館煙会所の分家「縁開所」誕生。
- ⑧ 沖合に浮かぶ宮本常一生地周防大島が縁で年輪塾を人間牧場で開催。
- ⑨ 沖縄青年の家の慶良間列島にて双海の青年たち10名と無人島に挑む青年の集い参加。
- ⑩ 日本で最後に夕日が沈む西表島まで夕日行脚に出かける。

などが挙げられますが、これは日本国内の思い出だけでこれ以外にも母校である県立宇和島水産高校のマグロ延縄実習船愛媛丸で18歳の時、南太平洋上に浮かぶイギリス領サント島へ行ったこと、総理府派遣の第10回青年の船班長として太平洋に浮かぶハワイ島へ行ったことなどが思い浮かぶのです。一方、私に強い影響を与えた島人もたくさんいます。

豊田渉さん(無人島キャンプ同行・青年団機関紙よもぎ発刊・松山市二神島・宮本常一さん(故人・民俗学者・年輪塾初回テーマ人物・周防大島)、宮本正勝

さん夫妻(漁業者・歌人・漁協婦人部長・宇和島市嘉島)、角市正人さん(議員・牧畑研究者・島根県西ノ島)、金本房夫さん(元校長・教育委員長・中島)、古野セキエさん(元公民館主事・中島)、佐伯真登さん(元村長・魚島村)、そして好んで島人になった兼頭一司さん(しまの会社代表・上島町弓削島)などなど、指折り数えても数え切れないほどの島人が頭に浮かんでくるのです。

便利さが失くしたもの

島には島特有の独特な文化が数多く残っています。島の民俗文化を丹念に訪ね歩き聞き取り調査した、「旅する巨人」と評される宮本常一の本を読めば、それらがいかに貴重なもので日本人の基底に潜むものがよく分かるのですが、残念ながらそれらの殆どはスピードの速い現代社会の荒波に呑み込まれ、消え失せたり、消え失せようとしているのです。日本中に点在する島々は、文明のいたずらとでもいえるべき変化で、この半世紀で大きく変貌を遂げました。島の最大の悩みは不便だったため、島に住む人たちは誰もが「便利さ」に憧れていました。道が走ったら、港が整備されたら、定期船が走ったら、そして橋が架かったらと、飽くなき便利さを求めて誰もが血のにじむ

ような努力をしてきたのです。しかし道
ができ、港が整備され、定期船が走り、
橋が架かって確かに島人の暮らしは便利
にはなりましたが、気がつけばそれらの
便利さと引き換えに、過疎と少子化と高
齢化と産業不振、それに嫁不足など足腰
立たないダメージを受けていたのです。
多分、その劣化や後退それに減少のス
ピードは他の農山漁村と同じように、い
やひよっとしたらもっと速いスピードで
進むものと思われそうですが、そのスปีド
を止める手立てや妙案は残念ながら中々
見つからないようです。

島を人生の樂園に

人口が減ったり高齢化したり、子ども
の数が減ることは社会的現象なので、い
くら知恵を絞っても余程のことがない限
り止めることはできません。ましてや第
一次産業以外これといった産業の少ない
島では、地産地消といいながら経済的活
性化も余り期待できないのです。「だっ
たらどうする?」、まず第一は人間の究
極の生き方である「ニコニコ・ピンピン・
コロリンシャン」と、島人みんなが楽し
く元気に生きることです。幸い島には豊
かな自然と美味しい食べ物、それに心温
まる人情があるのです。今、日本は一年
間の自殺者が13年連続して3万人を超え



埼玉県北本市の面々と由利島を目指す筆者 2007.6.30

ています。これは物質的には豊かになっ
ても生きる目標を失っているからに他な
りません。多少貧乏でもいささかの年金
もあるし、島が人生の樂園だと思えば温
暖な地域ですから遊び心さえあれば結構
楽しく生きれるのです。幸せの青い島は
日頃何気なく暮らす島の中にいることを
忘れないことなのです。

情報発信と交流

島には長い年月をかけて島人が育んで
きた独特の文化がありますが、これも本

当は遣し伝えて欲しいものの、限られた
人たちの力ではどうすることもできませ
ん。だとしたら島の外から応援隊を呼ん
で交流すればいいのです。楽しいことや
新しいアイディアをどんどん出して情報
発信さえすれば幾らでも人は集まってい
ます。前述した兼頭さんも島に憧れ島に
やって来た一人ですが、彼が島に來ただ
けで島は俄然活気を帯びてきたし、金本
さんたちが目論む「しまはく」は、行っ
てみたくなるようなメニューやプログラ
ムがどつきりです。地域づくりの基本は
①楽しいこと、②新しいこと、③美しい
ことをやれば必ず人は集まってくるので
す。何処にでもある夕日で年間55万人の
人が集まるようになった我が町双海町の
夕日によるまちづくりが、それを物語っ
ているようです。頑張れ島人たち。

わが国は 基はと言えば 全て島
大きき違う だけですからね
常一は 島を愛した 日本人
愛は真ん中 恋下心
島婆 昔はみんな 若かった
いずれ歳とる 八千草だつて
人生の 樂園島に 作ろうよ
ニコ・ピン・コロと 楽しく生きる
(若松進一 笑売噺より)